

バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第 144 号 [2017 年 2 月]

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8 章 22 節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋・・・

主の聖名を賛美します。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第 144 号をお送りします。今月の聖書研究会ではルカ 6 章 43 節以下を学び、6 章を終了しました。

「(良い木か悪い木か)木はそれぞれ、その結ぶ実によって分かる」、「人の口は、心からあふれ出ることを語る」「私の言葉を聞き、それを行う人は、岩の上に土台を置いて家を建てた人に似ている。」今回のテキストにある主イエスの教えはどれも一読して納得のいく言葉に聞こえる。しかし、ふむふむと読み流してはいけない。

イスラエルの土地は固い。この地を訪れた方のひとりが、「木々が青々と茂り続けるように、岩のような地面の下にパイプを通して木々の根に給水している」と教えてくださったことがある。もちろん、国土全部にわたってそうしているわけではないので、1 本の木もない荒野が延々と続く所もあれば、低い灌木しかない原野も見受けられる。家を建てる前に、樹木も根を張ることが難しい乾燥しきった土地柄なのだ。まるで、私たちの心のような。



自分では、自分自身が様々な試練を乗り越え、公平で正常な思考を持ち合わせていると信じているが、その自分が他から批判されることもある。実は目を向けずにいる汚点があるが、黙認または否認している。自分はちょっとくらいのことを許してもらえ、いや、許される権利を持っていると信じている。そうして自分には甘く、他人には厳しい。しかも、そういう自分の態度に気が付いていない。そうではないだろうか。ヨハネ福音書 8 章のはじめに出てくる、姦淫の女こそ、実は自分ではないのか。

岩を深く掘り下げる人とは、聖書を読んでその内容を学び、それを実行する人だとあるが、乾ききって固く強固な私たちの心では、これを実行するにはできない。この岩を少しずつ割り砕き、掘り進んで謙遜にならないと実行できない。そういう意味で、自分自身という固い岩を砕きながら深く掘り下げよと主はいわれているのではないだろうか。

前述の姦淫の女はまさに、手に手に石を持った群衆に囲まれたとき、自分の岩を割られる思いだったに違いない。自分が姦淫をする人間に堕ちてしまったには理由があっただろうが、その言い訳は世間を説得できるものではない。自分は見つからないと確信していたのに。なぜ私だけがこのような目に遭わなければならないのか。なぜ自分はここまで汚れてしまったのか。

その時、群衆に向かって言われた主の言葉「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」は、今度は群衆が自分たちの心の岩を掘る最初の作業となったが、一方では女にとって、掘り下げた根が地下水の存在を感じさせるものだった。そして群衆が去った後、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」とイエスが語られたときは、まさに彼女が地下水に到達した瞬間だった。

私たちが心の岩を割り、自分の汚点に対峙してこれを砕くのは痛い。しかし痛みを伴いながらも割り進んでいくと、岩の奥底に流れる地下水に到達する。そこには神の愛と赦しがとうとう流れている。この水を吸い、この水をくみ上げた樹木になると、私たちは良い実を結ぶ良い木となる。どれだけ強い洪水が流れてきても、押し倒されない木。良い物を心の倉に入れ、良い言葉があふれ出る人間。主のみ言葉に聞き、それを行う人物になる。今あなたが心の奥で望んでいる、そういう人になる幸いへと主は私たちを招いておられる。このことを、この平地の説教から学びました。

